和田実における「遊戯教育論」の特質

辛　　椿　仙

A Study of the Characteristics of "Playing Education" of Wada Minoru

CIN Chunsun

はじめに

今日の韓国で流行している幼児教育の考え方は，社会の高学歴志向や知識万能主義の風潮のもと，知識中心の早期教育論に偏っている。親たちは幼児教育機関に学校教育で求められている読み，書き，算数などの知識中心の教育を要求することが多い。このような問題を幼児教育界では認識しつつも，その対策はいまだ十分になされていない。韓国には幼児教育の考え方を根本的に変えるような刺激が必要であり，その刺激が幼児教育の本質を問い直し，取り戻す契機を提供すれば，意義のあることであると思う。

このような点に鑑み，明治以降着実な発展を遂げてきた日本の幼児教育のあり方を検討することは，まだ定着せず揺れ動いている韓国の幼児教育に有益な刺激を与えてくれるであろう。日本の幼児教育の本質を知るためには，その歴史を調べることが必要である。日本における幼児教育の歴史を調べて，明治初期に欧米の幼児教育の思想や実践が伝えられて以来，現在の幼児教育が成立するまでに先駆者たちの多大の努力が積み重ねられてきたことが私には分かった。日本の幼児教育が安定した発展を遂げてきた背景には，幼児のためになる幼児教育を作り出そうと努力した先駆者たちがおり，彼らによって，日本独自の幼児教育を構築する努力が絶えず続けられてきたのである。この点を考えてみると，今日の日本の幼児教育の基礎を作り上げた先駆者の考え方や実践の展開に関する研究は日本がどのようにして幼児教育を自国のものとして定着させてきたかを明らかにすることにもなり，ひいては混乱に陥っている韓国の幼児教育界に貴重な示唆を与えてくれるであろう。

本稿では，そのような先駆者の中でも特に，和田実（1876-1954）という人物に注目する。和田は1876年，東京に生まれ，1897年に神奈川県尋常師範学校を卒業し，神奈川県の小学校教員を経て1905年，東京女子高等師範学校嘱託となり，1907年に同校助教授となった。彼は同校付設の保育実習科で教えることになり，彼の保育思想をまとめ，1908年，中村五六幼稚園主事との共著という形で『幼児教育法』を出版した。同時に東基吉の後をついで，「婦人と子ども」誌の編集に当たり，活発な啓蒙的文筆活動を行った。しかし，1912年，彼は同校付属小学校の専任にまわされ，幼稚園と関係をたたざるを得なくなり，1915年，同校を退職，自力で私立「目白幼稚園」を開設した。さらに1930年には「目白幼稚園保姆養成所」を創設し，新時代に生きる保育者の養

成に尽力するかたわら，幼児教育学の体系化に努力した。このような和田の生涯から分かるように，彼は晩年まで幼児教育への情熱を少しも衰えさせることなく，一生を幼児教育とともに生きた人物であり，幼児教育の理論と実践の両方で活躍した人物であった。

日本の幼児教育における先駆者の中でなぜ和田を選んだのか。それは，まず第一に，私が先述のような彼の幼児教育一筋の生涯や独創的な教育思想に惹かれたからである。第二に，和田が欧米近代の幼児教育論をふまえながら，それを日本社会の状況に合う幼児教育論として組み直し展開した点[1]に着目し，その展開の過程を探ってみれば，韓国の幼児教育の現状にとって意義のある示唆を得られると思われたからである。第三に，和田が当時の恩物の取り扱いだけにこだわる幼児教育に鋭い批判を加え，遊び中心の画期的な幼児教育論を作り上げた改革精神に私は魅力を感じたからである。和田の幼児教育への批判の目や，しかもそれが単なる批判にとどまらず，積極的に改善して行こうとした彼の改革的精神は，韓国の幼児教育にとって大きな刺激になってくれるものと思う。

しかし，和田は倉橋惣三（1882-1955）と比べ，一般にほとんど知られていない。幼児教育関係の書物でも名前に言及されているだけで彼の教育論までは詳しく紹介されていない。倉橋と比べ，和田に関する先行研究は著しく少ないのである。そのため，和田の活動とその影響が，公正に評価されないままにおかれてきたように思われる。和田はなぜ，今日忘れられたのであろうか。和田は果たして，幼児教育の基礎づくりに貢献し得なかったのであろうか。

本稿では，和田の遊戯教育論の特質を明らかにし，その特質から和田幼児教育論がもつ独創性を把握し，その独自性の歴史的意義を見出して，和田の再評価を試みたいと思う。また，なぜ和田が忘れ去られたのかという点に着目し，彼の幼児教育論がもつ問題や限界についても考察していきたい。

このような作業を通して最終的には，韓国の幼児教育に示唆できるものを探ってみたいと思う。しかし，その示唆が時代のずれという限界のため，すぐ韓国の幼児教育の現状の改革に役立たなくても，韓国の幼児教育の考え方を徐々に変えていくことができるような刺激になれば，意義のあることであると思う。

1．和田実における「遊戯教育論」の特質と歴史的意義

「遊戯は幼児自然の本能に基づく自発活動で，幼児は是れに因って，其心身健全なる発達を招来するものである」[2]というのが和田の基本的考え方であった。遊戯は自然の特徴として，幼児にとって快感を伴うものである。快感を伴わないものは作業または学業であって遊戯ではない。さらに，遊戯は幼児の興味に支えられ，自由なものである。それは幼児の内的な興味に支えられた自発活動であるので，他から強制されることはない。快感を伴い，興味に支えられ，何物にも強制されない自由な活動として幼児が遊戯をする時，真の遊戯の意味が躍動していると和田は考える。

和田は欧米における児童中心主義の改革的教育思想に影響を受け，幼児を観察し，その生活状態を調査し，これによって教育の方法を決定しようと試みた。その結果，彼は幼児教育の対象は幼児の生活そのものであると結論づけることができた。このように幼児の生活に注目した和田は，

幼児の生活を休養，衣食住に関する生活，もっとも活躍するところの遊戯生活の三つに分けた。さらに和田は，休養と衣食住に関する活動は受動的な自己活動であるが，遊ぶことは能動的な自己活動であると，二つの部分に集約した。和田の「遊戯教育論」は，この後者の遊戯活動を論じたものである。

和田は幼児の生活における中心概念としての遊戯を心理的，生理的観点から発生的順序にしたがって分類し[3]，その意義・内容および教育的効果を詳細に考察している。すなわち，幼児の生活を見つめて，遊戯をその特性に即して区分し，それぞれの遊戯において，幼児固有のさまざまな能力が開発されることを明らかにした。

和田の「遊戯教育論」は彼の著作・論文において相当な分量を占めている。彼の最初の著作『幼児教育法』では，全244ページの中143ページ，すなわち，全体の約60パーセントが遊戯についての論述に当てられている。和田の幼児教育論は，まず，この遊戯を中心に構成され，彼の最初の著書から最後の著書に至るまで貫かれている。この「遊戯教育論」は明治時代の「恩物一辺倒の潮流に抵抗した新しい幼児教育論」[4]であったという評価を受けている。「遊戯教育論」が当時の幼児教育論と比べ，何が新しかったのかという点に注目し，歴史的意義を探ってみたいと思う。

まず第一に，幼児生活の重要な部分をなす，遊戯生活に注目した点である。和田は，幼児には大人の生活とは異なる幼児固有の生活があること，また，その生活の中心が遊戯であることを見出した。

第二に，遊戯は幼児の興味による自発活動であることを発見した点である。幼児が遊戯をする時，幼児の興味や幼児の能動的な側面が尊重されることに目を向けた。

第三に，幼児の発達段階を考慮した上で，それに適した遊戯を和田が考えた点である。彼はまた，その遊戯が幼児の発達にとってもっとも重要な役割，位置を占めていることを強調した。

第四に，遊戯をその特性に即して区分し，それぞれにおいて，幼児の能力が開発されることを明らかにした点である。これらの遊戯は一部に偏ることなく全面的に指導されるべきであると和田は主張したのである。

第五に，和田が当時の単純な保育項目を越えた，遊戯を中心とした彼自身の分類による保育内容を提案した点である。

第六に，日本の子どもの遊戯に着目した点である。このような日本伝統の遊戯を取り入れた和田の「遊戯教育論」は，「日本の子どものにおいのするはじめての幼児教育論」[5]にもなったという評価を受けている。

最後に，和田の「遊戯教育論」は幼児の遊戯を自分の目で確かめ，分類整理し，欧米の遊戯説を参考にしながら作り上げた論であるという点である。それは彼の実践を通じた経験と観察に基づいた研究の成果であると言えよう。

以上，和田における「遊戯教育論」の特質および歴史的意義を，七点にまとめてみた。すでに述べたように，彼の「遊戯教育論」は，文部省の保育項目による保育案からの脱却を図り，幼児の活動のすべてを組織・網羅するものであった。まことに清新で貴重な試みであったといって過言ではない。

2．当時の幼児教育界に与えた「遊戯教育論」の影響

和田は『幼児教育法』において，それまでの幼稚園が，恩物を教えることを本命としていたことを批判し，遊戯を中心とした幼児教育を探り出そうとした。和田は，この書で「広く自然の事物を素材とし，また，フレーベルの恩物を用いるとしても，各恩物の取り扱いを一つ一つ厳格に区別することをやめ，幼児のその都度の必要に応じて自由に遊ばせること」[6] を目指した。それは，恩物主義克服の一つのシンボルとなっている倉橋惣三が，その主張を，第19回3市（大阪，京都，神戸）連合保育会で明らかにした1912年より，さらに約4年前のことであった[7]。和田が『幼児教育法』で打ち出した「遊戯教育論」は，当時の幼稚園の保育内容，すなわち，1900年施行の小学校令施行規則の中で定められていた「保育四項目」[8] への批判でもあった。

このような，和田の幼児の自発活動である遊戯に注目した「遊戯教育論」の主張が，文部省の考え方に影響を及ぼしたのか，文部省は1900年の小学校令施行規則に示した保育内容の性格づけを，1911年，一部改定することによって保育四項目を廃止した[9]。これによって，幼稚園での手技をフレーベルの恩物を中心として行うという規定が効力を失い，それは幼稚園の保育内容の実態，幼稚園や地域の実態に即して自由に工夫できることとなった。

大正・昭和期にわたって幼児教育は，和田が主張した通り，小学校教育とは異なる内容や方法によって行われ，幼児の自発活動や興味を重視する幼児中心・遊戯中心の教育として発展した。幼児教育の現場では，自由遊びや戸外保育が多く行われ，遊戯中心の幼児教育が定着するようになった。

このような事実から，和田の「遊戯教育論」は，幼児の自発的遊戯を重視し，保母が中心となった保育から，幼児が中心となる幼児教育への思想的転換に一つの役割を果たしたものと言えよう。しかし，和田の「遊戯教育論」は，当時の教育者たちから必ずしもその真価を認められたとは言い難い。倉橋は和田の『幼児教育法』に対して，「余りにオリジナルな部分が多い」と言って批評を避けた。和田は当時のことを回想して，自分の思想は黙殺されたと後年語っている[10]。しかし，「余りオリジナル」で批判しがたいと述べた倉橋すら，後年，和田とほぼ同じく，遊びを中心とした幼児教育の展開を目指したことをみると，和田の「遊戯教育論」はその後における日本の幼児教育論の基礎づくりをしたものと考えられる。

3．実践に基づいた「遊戯教育論」

和田における「遊戯教育論」は，理論だけで構築された幼児教育論ではなく，彼の理論研究と実践の経験に基づいて作られた幼児教育論であった。

和田は東京女子高等師範学校助教授として同校付属幼稚園に勤務し，その実践から幼児には遊戯生活が何よりも重視されるべきであると気づき，遊戯を中心内容とする『幼児教育法』を著した。

また，彼は東京女子高等師範学校退職後も目白幼稚園を設立し，自分の目で幼児を観察しながら，幼児の遊戯に関する着実な研究を続けた。その実践を整備，集約し，『実験保育学』，『保育学』を書き上げたが，この二つの著書の中心をなす教育論は，幼児の遊戯を自分の目で確かめて

作り上げた「遊戯教育論」であった。

このように和田の「遊戯教育論」は，実践を通した研究を理論化したものであったと言える。したがって，彼の「遊戯教育論」は実践を抜きにしては考えられないものである。それゆえに，彼の「遊戯教育論」は，すでに見たように，幼児教育の実際に十分応用できるような形で成り立っている。

和田は幼児の遊戯に関する見解を，著書だけでなく，雑誌「幼児の教育」にも数多く載せているが，その内容は自分の幼稚園で経験したことや自分の幼稚園で行われている遊戯の紹介などからなっており[11]，実践で生かされている「遊戯教育論」である。その中には「四月の手技材料」というような題目で，何回かに分けて月ごとに手技に関する内容を載せた文があり[12]，その月に合う遊戯の種類や遊び方などを詳細に取り上げ，その意義を説明している。また，親に幼児の遊戯生活の重要性を訴える内容もあるが，それは幼児教育の場だけでなく，家庭の中でも幼児の遊戯がどれほど大切なものであるかを親に自覚させる，生きた「遊戯教育論」であった。和田の「遊戯教育論」は，実践によって作り上げられたがゆえに，実践を指導しうる力をもった幼児教育論として成立することができたのである。和田は欧米の近代教育思想をふまえながらも，たえず幼稚園教育の実践や幼稚園における子どもの生活に接し，具体的な現実の中から幼児教育の理論を構築していくという姿勢を貫いた。それだけに，和田の幼児教育論はきわめて現実志向的であり，教育実践の指標としての役割を十分に果たし得たと言えるのではなかろうか。

4．和田実の再評価

(1) 和田実はなぜ忘れられたのか

以上述べてきたように，和田は日本の幼児教育の基礎を築いた。しかし，現在，和田は忘れられてしまったかのようである。それは倉橋と比較すれば明らかであろう。幼児教育界に残した功績がほとんど忘れられてしまったことは，まことに不思議であるが，事実である。なぜなのだろう。それには三つの原因が考えられる。

まず第一に，幼児教育界における人物研究の不十分さである。幼児教育界の人物研究としては，湯川嘉津美が「幼児教育史研究の課題と展望」（日本教育史研究会，『日本教育史研究』第13号，1994，8）で指摘しているように十分とは言えない。もっとも，倉橋についてだけは日本近代幼児教育思想の確立に大きな役割を果たした人物として，彼の誘導保育論を中心に多くの人が検討，研究を進めている[13]。

ここで，幼児教育界の研究動向を保育学会編の『保育年報』から探ってみる。1960年代までは幼児教育界の先駆者やその業績を評価し直す研究が見受けられるが，1970年代からは幼児の発達を中心とした言語や身体，音楽，美術，文字学習などの幼児の能力啓発に関する研究が盛んになっている。このように人物研究がほとんど行われなくなり，行われている人物研究は倉橋だけに集中し，倉橋以外の人物は幼児教育界でさえ忘れ去られてしまっているのである。

第二に，現在の幼児教育界の研究が，理論研究に偏っているという問題である。倉橋に研究が集中していることは，彼が幼児教育を体系化し，膨大な研究業績を残している点に起因するであろう。幼児教育の研究には実践を中心とした研究がほとんど見られない。

和田が倉橋と同時代に活躍し，なお，倉橋より先駆的な意見を述べていたにもかかわらず，今日の倉橋の評価に比べると，比較にならないほど影の人になってしまったことは，このような問題を示唆しているであろう。倉橋だけが日本の幼児教育の先駆者であるかのように注目されているということは，倉橋の体系的な幼児教育思想が誕生するまでの前段階の研究やその基礎を作り上げた人々にはほとんど目が向けられていないことを示している。

教育学の研究が理論研究に偏重していることは，今日よく指摘されている問題であるが，さらに言えば，実践研究はその研究の方法論的難しさのためなかなか進んでいないのが現状である。このような研究の偏りは，実践に生涯を捧げた多くのすぐれた人物を見逃してしまっている。子どものために生涯を尽くした実践者は，教育の現場で努力している教育者の心の支えになる。

教育は目立たないが日常的な地道な実践によってこそ，現実に意味を与えることができる。和田が実践による工夫や観察の中から独創的な理論を作り上げたことが示すように，理論は実践の中から生み出され，また，実践によってのみ理論は革新されてゆくものである。それゆえに，理論研究の前提をなしている実践の具体像こそ，もっと研究がなされるべきであろう。和田は幼児教育の実践一筋で生涯を送った教育者である。こうした状況の中で忘れられてしまったことは，実は現在の研究動向と水準の反映と言わざるを得ないのだから不思議なことではないかも知れない。

最後に和田の教育論がもつ限界である。彼は幼児の遊戯生活の組織化という大きな業績を残しながらも，その理論構成には弱点があった。自分なりに考えたことを述べれば，次のようになる。

第一に，和田における幼児教育の二元論的把握である。大人からしつけられる習慣形成に重点をおいた訓育と，幼児の興味による自発活動である遊戯が，幼児の外面から作られる生活と幼児の内面から作られる生活という形ではっきり区分されている。すなわち，訓育は遊戯とは個別に独立して行われなければならないというのが彼の考えであった。しかし，この考えは，明治期の恩物主義が，恩物の取り扱いと訓育とを二元的に考えた思考方式と一致している。幼児は外部からの刺激と内面からの自発によって発達を促される。また，自分でも発達の意志をもった統一的な存在であるという現在の観点からみると，こうした分け方には違和感を感じざるを得ない。

本稿で取り上げた「遊戯教育論」が習慣形成をなす訓育とほとんどつながりをもたず，論じられたことは，和田におけるこのような幼児教育の二元的把握によるものであると考えられる。和田は画期的な幼児教育を提唱したが，時代的制約を完全に乗り越えることはできなかったということができる。

第二に，幼児教育を小学校の準備教育として捉えている点である。和田は幼児教育は小学校教育と違う教育内容や方法によって行われるべきであると主張したが，それは幼児教育が小学校で行われる学習を有能にこなせる準備をする教育であるからである。小学校に入っていきなり学習を与えることは無理がある。したがって，幼児期は小学校とは違う形で幼児に合った適切な教育（すなわち，遊戯を通した教育）を施し，将来の課題への準備をさせるべきであると考えたのである。

「幼児の教育」で幼稚園児の父兄を対象にして，「将来の学習に対する真の準備を用意させることが幼稚園の使命である」[14] と述べたことからも彼の小学校教育への準備教育としての教育の考え方を読み取ることができる。将来の準備教育としての幼児教育のあり方に見直しが促されて

いる今日，和田のような考え方は再考されなければならない。とくに，幼児教育が就学前教育と呼ばれるようになっているが，その言葉から小学校入学間近の子どもだけの教育，小学校教育の準備教育と考えられてはならないであろう。

和田の教育論がもつ弱点を自分なりに把握してみたが，こうした理論的限界は今日，和田を忘れさせる一つの原因になったではなかろうか。

(2) 倉橋惣三との共通点および相違点

和田の名は，現在ではあまり知られていないが，日本の幼児教育の歴史において，その改革発展に尽くした業績は，倉橋に比べ，決して劣るものではない。和田と倉橋は，同時代の幼児教育の理論的な指導者として，ともに影響し合う関係にあった。とくに和田は倉橋より早く幼児教育界に踏み出した先輩として，倉橋に影響を与え続けたものと思われる。それは和田が恩物主義克服を主張した4年後，倉橋が同じ主張を明らかにするなど，倉橋の幼児教育論から和田と共通する点を見出すことができるからである。以下では両者の共通点や相違点を探ってみることを通して，和田の再評価を試みたいと思う。

まず，和田と倉橋の共通点を考察すれば，次のようである。

第一に，両者ともに日本の幼児教育の草創期に生まれ，日本の幼児教育の土台を築く時期に生きた人である。

第二に，両者ともに欧米の近代教育思想から学んだことである。彼らの幼児教育の基礎をなすものは，近代教育思想である。

第三に，両者は近代教育思想家の中でもフレーベルを幼児教育の開祖として位置づけ，フレーベルに敬意を払っていた。ゆえに，フレーベルの言葉を数多く引用し，自分の考えや立場を示そうとした。

第四に，欧米の教育思想から学んで，それをそのまま輸入して，紹介したのではなく，日本的な性格や精神を失わずに，主体的に受け入れた。彼らの，日本的伝統を考えた上での幼児教育の展開は，注目に値するものである。

第五に，東京女子高等師範学校付属幼稚園とかかわりがあり，「幼児の教育」の編集を担当した。

第六に，明治期の恩物主義を批判し，実践で恩物を積み木玩具として使った。二人はともに恩物主義克服に先駆的な役割を果たした。

第七に，机の保育から脱し，幼児の自由な遊戯に目を向けた。その遊戯の中心は子どもの自発活動であって，子どもに堅苦しく何かを教授することではないとした。

第八に，児童中心主義に立っていたが，子どもをただ遊ばせておくことには批判的であった。すなわち，児童中心主義は放任主義ではないことを明らかにした。

第九に，両者は幼稚園無用論に対して，幼稚園教育が子どもに必要であると主張した幼稚園擁護論者であった。

第十に，実践を指導する理論を構築した。

次に両者の相違点について考察してみよう。

第一に，両者の生涯には著しく対照的なところがあった。倉橋がいろいろな点で順境に恵まれ

た一生を送ったのに対し，和田はどちらかいえば，不遇であり，逆境にめげず，困難に堪えて志を貫いた。略歴を比べてみると，倉橋が常に表街道を歩いたのに対して，和田はむしろ恵まれない境遇の中をひたむきに歩いた。

第二に，両者ともに「誘導保育」を提唱したが，その考え方には相違がある。和田の「誘導保育」の考え方は，幼児の生活すべてにおいて求められるべき方法で，しつけの教育においても，遊戯の指導法に求められるべき方法である。倉橋の「誘導保育」の考え方は幼児生活の誘導ということで，断片的，刹那的な子どもの生活にある中心を与えて系統づけてやる指導をいうのである。言いかえれば，充実指導の上に子どもの興味によく即した主題をもって子どもの生活を指導することである。

第三に，両者は幼児生活の重視という面では共通しているが，その生活の着眼点が少し違う。和田は幼児教育の対象を，習慣的生活と遊戯的生活の両方面をみて，これを誘導的方法をもって教育することを強調しているが，倉橋の幼児教育の対象は，幼児の生活そのものである。倉橋は幼児の生活を最大限に尊重し，これを「生活を生活で生活へ」という言葉で表現している。

第四に，遊びの中での子ども同士の相互作用に関して違う点が出てくる。和田は幼児の遊びが，子ども個人の自発的な衝動や保育者の誘導によって成り立つと考え，集団生活での子ども同士の相互作用についてはあまり述べていない。一方，倉橋は「相互的生活」といい，集団生活での幼児の遊びなかまへの欲求を重視し，相互生活の中で自由なる発達が発揮されると考えた。

第五に，戦争に対する態度に相違点があった。和田は戦争に対しても無関心のようであった。子どもの世界は常に平和で楽しい世界でなければならないと思ったので，戦争が起こっている不遇な時代には子どもの幸せを守ることが何よりも優先されるべきであると思った。戦時下に刊行された彼の最後の著『保育学』には，戦争に関する言葉はほとんど見当たらない。「錬成」という語句が取り上げられてはいるが，わずかである。戦争中の幼児教育でもあくまでも子ども中心の幼児教育でなけれなならいという考えを貫いた。倉橋は，戦争に疑問を抱かなかったのみならず，「皇国ニ生レタル喜ビ」を積極的に謳歌しようとした。そのことは1943年8月，「戦時保育講習会」で三日間，参加者に講義した「戦時保育の本義と実際」が4号にわたって掲載されている「幼児の教育」から読み取ることができる[15]。

以上で和田と倉橋の共通点と相違点を考察した。二人は，数年間，同時に東京女子高等師範学校付属幼稚園に関係したことがあり，フレーベル会の機関誌「婦人と子ども」(「幼児の教育」)の編集を和田の後，倉橋が担当するなど，和田の後を倉橋が継承している事実を窺うことができる。しかし，両者とも相互の名をあげて論評することはなかったが，二人に友情は絶えなかったようである。「和田の保母養成所の開校式に倉橋が『巧みな話』をしたと伝えられるし，のち，倉橋も『幼児の教育』に和田の寄稿を要請したといわれる」[16]。彼らの幼児教育論は確かに相違点があるが，同じ方向を目指して日本の幼児教育を指導したと言えよう。

おわりに

本稿では，和田の「幼児教育論」の特質の把握を通して，その特質がもつ独自性から歴史的な意義を見出し，彼の再評価を試みた。また，和田がなぜ，忘れられてしまったかという点に着目

し，彼の幼児教育論がもつ問題や限界について自分なりの考えを述べ，若干ながら考察を行った。次いで，倉橋との比較を通して，和田と倉橋がもつ多くの共通点から，倉橋に与えた和田の影響を探ってみた。しかし，これらの考察は，主に和田の「遊戯教育論」の範囲内で行われたもので必ずしも彼の幼児教育論のすべてを含むものではない。それゆえに，本稿が不十分さを逃れ得なかったことを自覚している。

私は和田の研究を通して，彼が日本の幼児教育の基礎を作り上げた先駆者であることを知ったが，その業績がほとんど評価されず，彼の貴重な教育論も埋もれたままになっていることに驚いた。これに反して倉橋の場合は，現在でもあらゆる方面で研究が活発に進められている。日本幼児教育界の人物研究が，あまりにも倉橋に偏っているのではないかという印象を受けた。

和田に関する先行研究は著しく少なく，同一の人物によって書かれたものや，限定された紙面で，彼の幼児教育論のすべてを論じる，幅広いが浅い研究に限られている。それゆえに，和田の幼児教育論は，一部の研究者によって論じられてきた傾向があり，彼の思想や理論を専門的に掘り下げて論じた研究はほとんど行われていない。私が本稿で取り上げた「遊戯教育論」は，先行研究のどこでも触れられていたが，紹介にとどまる程度のものが多かったので，自分の研究がどの程度のものか，判断に苦しむ。

しかし，私は和田研究を通して，韓国の幼児教育に示唆を与えるものを見出すことができた。三つにしぼって述べることにしよう。

まず第一に，和田の欧米近代教育の受容の仕方から韓国の現状に示唆するものがある。和田は欧米から受け入れた近代教育思想を日本文化の脈略で主体的に理解し，日本の子どもの生活に合った幼児教育論を展開していった。彼は明治初期のフレーベルの恩物主義を徹底的に批判する代表者であるが，決してフレーベルの教育思想そのものを批判したのではない。恩物の取り扱いを教科のように幼児に教えていた当時の幼稚園教育の方法を批判しただけである。本当はフレーベルの本来の精神にたちかえって幼児の自由な自己活動の発揮を強調したと言える。フレーベルから学んで，その形を真似るだけにとどまらず，自分のものとして定着させようとしたのである。

韓国では現在，欧米幼児教育の理論と実際の受容に力を入れている一方で，韓国の実情に合う幼児教育を作り出そうとする努力が進められている。このような韓国の幼児教育の現状を考えると，和田の外来思想の理解の仕方や学び方に学ぶことは意義のあることであろう。和田が外来文化の主体的受容という点ですぐれたモデルであると言ってよい。

第二に，和田が幼児の遊びに注目した点から韓国の現状に示唆できるものを探っていきたい。はじめのところで若干述べたが，日本の明治初期の恩物中心のあり方は，時代ははるかに違っても韓国の現在の知識中心の幼児教育のあり方と共通点をもっているように思われる。明治初期，日本がもっぱら教科的な恩物の取り扱いにこだわっているように，現在韓国では小学校の準備教育としての知識中心教育にこだわっている。この点から和田の遊戯教育論は知識中心教育に偏った韓国幼児教育のあり方に，幼児の遊びの重要性を覚醒させ，バランスのとれた幼児教育になるような刺激を与えてくれるであろう。時代のずれがあるため，和田の理論がそのまま韓国の現状に役に立たなくても，彼が訴えた遊戯教育の意義を読み直していくことができれば，韓国の幼児教育の考え方も徐々に変わっていくであろう。

最後に，和田の先駆的視角や改革者精神から示唆を探りたいと思う。机に座っている幼児に，

保母が恩物の使用法を教えるという当時の幼児教育の実践を目の前にした和田は，同じ実践に携わっていた他人と違って疑問を抱いた。フレーベルの本当の精神を忘却していた当時の幼児教育の現実を鋭く批判できた彼の先駆的視角や単なる批判にとどまらず，積極的に改善して行こうとした彼の改革者精神は，幼児教育の考え方の見直しが要求されている韓国の幼児教育に貴重な示唆を与えてくれるものであると思う。

このような点に注目し，私は和田の貴重な教育的思想や実践から学んだものを韓国の幼児教育に生かしていきたいと思う。

本稿では，幼児教育の実践を踏まえながら構築された先駆的な理論であったにもかかわらず，埋もれたままになってしまっている和田の「遊戯教育論」を探り，その特質と意義を明らかにしてみたが，このような試みが和田の再評価の一つの契機になれば幸いと思う。

しかし，本稿で取り上げた和田の「遊戯教育論」は，和田の教育思想把握の手がかりとはなったが，もとより，本稿だけで彼の幼児教育論の全体を把握するまでには至っていない。この不十分さを自覚しつつ，今後は本稿で取り上げたテーマを基礎にして，和田における幼児教育論の全体像を浮き彫りにすることに努めていきたいと思う。

註

1）和田の幼児教育思想には，多くの近代教育思想からの影響を読み取ることができる。彼の最初の著作『幼児教育法』においてしばしば，コメニウス（Johann Amos Comenius，1592-1670），ルソー（Jean-Jacques Rousseau，1712-1778），カント（Immanuel Kant，1741-1804），ペスタロッチ（Johann Heinrich Pestalozzi，1741-1827），ヘルバルト（Johann Friedrich Herbart，1776-1841），フレーベル（Friedrich Wilhelm August Fröbel，1782-1852），スペンサー（Herbert Spencer，1820-1903）などの教育者の名を挙げている。渡部晶によれば，「和田はフレーベルを中心とした近代ヨーロッパの新教育の潮流に身をおいて，教育の本質を探求し，そこから保育の原理をみいだした」という。
和田はとくに，ペスタロッチとフレーベルに幼児教育思想を根柢を求めた。それは彼が著作『保育学』で，「教育の進歩となった，其の実際的先駆者の最も偉大なるものは，ペスタロッチとフレーベルの二人である」と言っていることから確認することができる。彼は当時，教育学として認識されていなかった幼児教育学を教育学の中に位置づけようと試みた。と同時に，その幼児教育学の研究方法は科学的でなければならないと考えていた。このように彼の発想は，すべて近代教育学から受けた影響によるものと見なすことができる。
このように和田の幼児教育思想の出発点は，近代教育学であったが，それを下敷きにして当時の日本の幼児教育のあり方を批判，改善しようとした。しかし，彼が考える改善は，西欧の幼稚園教育方式を日本の幼稚園にそのまま移すようなものではなかった。彼はフレーベルの思想に自分の幼児教育思想の根拠を求めていたが，フレーベルの思想を自分の幼児教育に生かそうとした時は，恩物の取り扱いよりは，自発的な幼児の遊戯に着目したのである。

2）和田　実『実験保育学』，フレーベル館，1908年，岡田正章『大正・昭和保育文献集（第10巻）』所収，日本らいぶらり，1932年，76ページ。

3）和田は三つの著書を残している。最初の著書は本文で述べた『幼児教育法』(1908）であり，次いで『実験保育学』(1932）を，最後に『保育学』(1943）を著述した。
和田における遊戯種類の分類は，これらの著作によって少し異なる部分がある。『実験保育学』や『保育学』における分類法は，彼が幼児教育の実践の経験を通して作り上げた分類法で，『幼児教育法』における最初の分類法を修正し，補完したものである。ここでは彼の最後の著作『保育学』における分類法に基づいて考察することにする。彼の分類法を列記すると次のようになる。

一，収得的経験的遊戯
甲，直感に属する遊戯，イ，観察，ロ，実験，ハ，鑑賞，二，蒐集
乙，内観に属する遊戯，聴話（童話を聞くこと）
二，模倣的発表遊戯
甲，実際生活其侭の模倣遊戯
乙，想像的構成的模倣遊戯
三，練習的構想的発表遊戯（創作発表の素地）
甲，音楽的遊戯，唱歌，舞踊
乙，技術的遊戯，手技，手工，図画
丙，理知的遊戯，談話，考へ物
丁，労役的遊戯
戊，運動的遊戯

4）岡田正章ほか編『保育に生きた人々』，風媒社，1975年。この本では日本における幼児教育の先駆者21人が紹介されているが，そのなかに「恩物一辺倒に抗した新しい保育論の確立」という副題で和田が取り上げられている。

5）宍戸健夫『保育の森 ── 子育ての歴史を訪ねて ──』，あゆみ出版，1994年，51ページ。

6）『保育に生きた人々』，102ページ。

7）1912年6月に開催された第19回京阪神連合保育会で，倉橋は彼の処女講演「幼児教育の新目標」で，恩物主義の克服を説くとともに，進歩的な保育思想を打ち出した。

8）保育四項目の内容は，遊嬉，唱歌，談話，手技であった。

9）それまで規定されていた保育事項が削られた。すなわち，保育内容の四項目を示すだけにとどめて，それぞれどのような趣旨で取り扱うべきかを示した条文が削除され，一層自由な保育法が認められるようになった。

10）「幼児の教育」，「お茶の水時代（完）── 思い出をたどる ──」（第33巻3号），1933年，73ページ。

11）「幼児教育とお正月」，「婦人と子ども」（第9巻1号），1908年。
「兎を飼った経験」，「幼児の教育」（第20巻6号），1930年。
「夏期幼稚園に就て」，「幼児の教育」（第33巻7号），1933年。

12）「幼児の教育」に月ごとに手技に関する内容を載せた文は，次のようになる。
「十月の手技材料」（30巻10号，1930年），「十一月の手技材料」（30巻11号，1930年），「十二月の手技材料」（30巻12号，1930年），「一月の手技材料」（31巻1号，1931年），「二月の手技材料」（31巻2号，1931年），「三月の手技材料」（31巻3号，1931年），「四月の手技材料」（31巻4号，1931年），「五月の手技材料」（31巻5号，1931年），「六月の手技材料」（31巻6号，1931年），「七月の手技材料」（31巻7号，1931年），「八月の手技材料」（31巻8号，1931年）。

13）倉橋に関する最近の代表的研究を取り上げるだけで次のようになる。
森上史郎『児童中心主義の保育』（教育出版，1984年）は倉橋を「児童中心主義保育の確立」者と捉え，東基吉から倉橋の保育改革への歩みを跡づけている。さらに森上は倉橋の膨大な著作，資料をもとに『子どもに生きたひと・倉橋惣三 ── その生涯・思想・保育・教育 ──』（フレーベル館，1993年）を刊行し，倉橋研究を前進させた。
一方，宍戸健夫は倉橋の幼児教育思想を同時代に保育問題研究会会長として活躍した城戸幡太郎のそれとの対比において検討する。近著『日本の幼児保育 ── 昭和保育思想史 ──』上・下（青木書店，1988・89年）は日本の幼児教育の実践や運動，制度，理論の展開を昭和という時代に焦点をあてて歴史的に明らかにしようとした労作であり，とくにその上巻における倉橋に関する叙述には宍戸の倉橋研究の特色がよく現れている。
諏訪義英『日本の幼児教育思想と倉橋惣三』（新読書社，1992年）は倉橋における家庭教育論および家庭教育と幼稚園・保育所の教育との関係論の検討を中心に，倉橋の幼児教育思想の評価と位置づけを行ったものである。
また，松野修「倉橋の保育思想(1)(2)」（『名古屋大学教育学紀要』教育学科，38・39-1，1991・

92年）は，戦前，戦中，戦後の社会理念の転換に対する倉橋の対応をもとに，戦前，戦後を通じて日本の幼児教育界のオピニオン・リーダーであり続けた倉橋の全体像の描出を試みている。

14）「新入園児の父兄に告ぐ」，「幼児の教育」（第39巻4号），1939年，12ページ。

15）倉橋の「戦時保育の本義と実際」の目次は次のようになっている。

一，戦時保育の意義

二，戦時保育の重要性

三，戦時保育の問題

㈠　保育の目的方面に就て

㈡　保育の保育方面に就て

㈢　保育の内容方面に就て

四，戦争それ自身の取入れ

五，戦争下生活の取入れ

16）坂元彦太郎「幼児中心主義を叫んで ── 和田実の生涯と思想 ──」，創立60周年記念実行委員会編『東京教育専門学校創立60周年記念誌』，1990年，176ページ。

参考文献

和田　実『幼児保育法』（講演の速記），1913年。
倉橋惣三・新圧よし子『日本幼稚園史』，東洋図書，1930年。
荘司雅子『幼児教育概論』，福村出版，1967年。
文部省『日本幼稚園教育九十年史』，ひかりのくに，1969年。
東京専修学校編『和田実遺稿集』，1975年。
岡田正章・森上史郎『保育基本用語事典』，第一法規出版，1980年。
岡田正章編『世界の幼児教育 ── 日本 ──』，日本らいぶらり，1983年。
湯本信夫『自然保育の原点 ── 領域「自然」の前進をめざして ──』，学芸図書，1983年。
久保いと・田中未来編『子どもの生活と保育の歴史』，1984年。
唐澤富太郎編『図説教育人物辞典 ── 日本教育史のなかの教育者群像 ──』，ぎょうせい，1984年。
目白保育学園編『70年のあゆみ』，春恒社，1986年。
石川松太郎『日本教育史』，玉川大学出版部，1987年。
高橋一之ほか編『新幼稚園教育要領の解説』，第一法規出版，1989年。
高橋史郎編『新しい実践と創造をめざす保育内容の研究』，峨野書院，1984年。
細谷俊夫ほか編『新教育学大事典』，第一法規出版，1990年。
山田　敏『遊びと教育』，明治図書，1994年。

（博士後期課程1回生，教育学講座）